Re

2012. 4 NO. 174

Building Maintenance & Management

特集 | ゆとり

一般財団法人 建築保全センター

「ゆとり」を生み出す住まいのつくり方

―「プロセス」を楽しむ暮らしのすすめ―

甲斐（かい）　徹郎（てつろう）
豊かな住生活国民推進会議 副会長／㈱チームネット 代表取締役

1 「体感」の原理と二つの建築手法

「ゆとり」のある暮らしをいかにつくるか。そのための住まいのつくり方として，「パッシブ」と呼ばれる建築手法について紹介したい。

「パッシブ」とは，一義的には，快適な熱環境をつくりだす建築手法の一つである。その手法を，「体感」の原理に遡って説明したいが，例えば，次のような実験をしてみると，この原理に誰もが興味を抱くと思う。

二つの素材の違うモノが目の前にあるとする。一つはふんわりとした毛布で，もう一つは鉄の塊である。それぞれを素手で触ったとき，鉄はヒヤッとしていて，とても冷たく感じるが，毛布は，暖かく感じる。その温度差を，鉄と毛布とでは，「10度くらいは温度が違う」と大方の人が答えるはずである。では，本当の温度差は何度だろうか？実は，その答えは，「0度」である。毛布も鉄もどちらも全く同じ温度なのである。例えば，この実験をしている部屋の温度が25℃なら，その部屋にあるものは，どれも25℃のはずである。

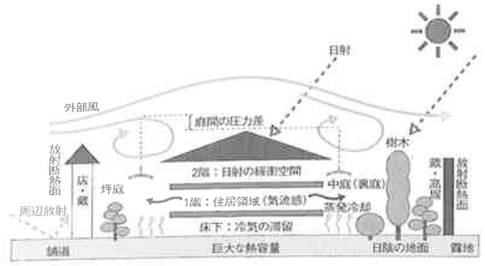
この実験は，大変重要なことを気づかせてくれる。それは，全く同じ温度でも，冷たく感じたり，温かく感じたりすることがあることである。つまり，『体感』は実際の温度によって決まるものではない。では，『体感』は，何によって決まるのだろうか。それは「熱の移動スピード」である。鉄を触ったときは，その伝導率の高さによって，熱はサッと移動する。その速さが「冷たい」という感覚をもたらすのである。一方，空気を含んだ毛布は，熱を伝えにくく，触ったときの熱の移動はゆっくりで，温かく感じるのである。

このように，私たちが「冷たい」「温かい」と感じる感覚は，自分の身体とそれを取り巻く環境との間で起きている「熱の流れ」によって生じる。その「熱の流れ」をどのような手法でコントロールするのか，その手法には，大きく二つのアプローチ方法がある。一つは，熱の出入りの極めて少ない箱の中で(閉じた系の中で)，機械的な装置によって身体周囲で起こる熱の流れをコントロールする手法であり，もう一つは，箱を閉じずに(開いた系で)，身体と開かれた環境との間で起こる熱の流れをコントロールする手法である。そして，建築の分野では，前者を「アクティブ」，後者を「パッシブ」と呼んでいる。

2 エアコンに頼らない京の町屋の涼しさ

「パッシブ」な事例として，よく紹介されるのが京都の町屋の建築である。

町屋は，表通りに面した側から「店―坪庭―居間―裏庭―蔵」で構成されている。アスファルトに覆われた表通りはとても暑いが，建物の中に一歩足を踏み入れると，建物の内部から涼しい風が湧き出してくるのを感じる。涼しさの秘密は，坪庭と裏庭の二つの庭にある。それぞれの庭は，蔵や店に囲まれ，日差しが直接差し込まないように樹木が植えられているので，冷気の溜まった井戸



出典：Solar cat No.36

図1 町屋の涼しさの仕組み

のような空間になっている。この二つの庭が涼しさをもたらす貴重な冷熱源となっている。

町屋では，二つの庭に対して開かれた生活が営まれている。上空を通り抜ける風によって，上方に解放された二つの庭の間で圧力差が生じ，その圧力で空気が揺らぎ，庭に挟まれた室内空間を冷気が行き来する。このそよそよとした空気の揺らぎが，町屋の湧き出してくるような涼しさの仕組みなのである。

3 現代の建築手法がもたらした暮らしとは

京都の町屋のような「パッシブ」な住宅に対して，現代の多くの住宅は，「アクティブ」な手法でつくられている。そして，技術の進化とともに，この「アクティブ」な手法は，室内における快適性を飛躍的に向上させることを可能にした。

さらに，高効率な装置の開発や，高まるエネルギー依存体質を補うための太陽光パネルの設置，そして，さらにIT技術の導入によるエネルギー使用の最適化を図るスマートハウス化などによって，今日の省CO_2という課題に対しても解決を図ろうとしている。

こうした現代の「アクティブ」な手法による住まいづくりに対して，かつての私たちの住まいは，京都の町屋のように，「パッシブ」な手法によってつくられていた。高度成長期より前の時代にさかのぼると，当時は現代のような技術力によって室内環境を人工的に制御する手法はなかった。だから，当時の住宅では，「アクティブ」な手法は存在せず，「パッシブ」な手法に頼るしかなかったのである。そういう視点で，古くから残る民家のカタチを見てみると，そこには屋敷林があり，のどかな風景の中に暮らしの佇まいが形成されていることに気が付くはずである。それらの屋敷林は，冬には寒さを，夏には暑さを和らげるためになくてはならない重要な要素であった。

では，「ゆとり」のある暮らしを追求しようとした場合，かつて高度成長期前の日本ののどかな生活を再現することが理想的なのかというと，決してそうは言えないところがある。高度成長期以降，「アクティブ」な技術が私たちにもたらしたものは，「便利さ」である。逆に言うと，かつてののどかな生活は，とても「不便な」ものであった。住まいをつくる「アクティブ」な手法が私たちにもたらしたものは，スイッチ一つで，「快適さ」という「結果」を得ることができるという「便利さ」であった。この「便利さ」の実現は，誰をも魅了し，その魅力が，市場経済を活性化させ今日の経済大国を形づくる大きな原動力となってきたと言える。1950年代に三種の神器と呼ばれた「冷蔵庫」「炊飯器」「洗濯機」，そして，1960年代に3Cと呼ばれた「カラーテレビ」「クーラー」「自家用車(カー)」などの急速な普及現象が，そうした世の中の動きを物語っている。

4 住人を壁の内側に孤立させてしまう「便利な」暮らし

こうした「便利さ」の魅力は，「結果」をスイッチ一つで得ることができる，つまり，「プロセス」を省くことができるという点にある。では，「プロセス」を省略し，「便利さ」を生み出す現代の「アクティブ」な住まいづくりは，私たちをどの

ような暮らしに導くのであろうか。

その問題点を指摘するなら，こうした住まいの形態が，私たちの生活を狭い建築空間の中に孤立させてしまう点にあると思う。今日主流となっている「アクティブ」な手法は，住宅の外環境との関係を重視せず，室内にいながら，そこの住人に何の不自由さも感じさせず，快適に過ごさせることのできる装備が整えられている。本人が元気なうちは，そうした装備がもたらす「便利な」面だけが重要視されるが，やがて体が衰えて身動きが自由にできなくなったときに，自分は壁の内側に隔離され，独りぼっちでいることを実感することになるのだろう。

では，便利で快適なだけでなく，真の意味での「しあわせ」をデザインするためにはどうすればいいのか。そのためには，建築のあり方を問い直さなければならない。それを模索するために「ゆとり」という言葉は，大変重要なキーワードになる。

5 「プロセス」を省かない暮らしがもたらすもの

「便利さ」の追求を重要視する世界では，「プロセス」は省かれる対象となっていた。しかし，「便利さ」だけが重要なのではなく，「便利さ」の追求の過程で見失われてしまった「しあわせ」の本質こそが，この「プロセス」そのものだったのではないか。

ここでもう一度，「プロセス」を重視する「パッシブ」という住まいづくりの手法が生み出してきたものを，確認してみたいと思う。

まず，その一つとして，豊かな「景観」を挙げることができる。

例えば，沖縄の本部半島にある備瀬という集落を航空写真（写真１）で見てみると，なんとも美しいカタチをしている。集落全体が森に囲まれ，一つの生き物のような豊かな環境が形成されている。この環境は，一軒一軒の家が，それぞれの宅地の四方を高さ５～６ｍの樹木によって生垣のように囲まれ，そうした宅地が約300並び連なることで形成されている。

こうした豊かな環境が生まれた背景には，台風対策があった。備瀬の集落では，建物全体を樹木で包み，さらに隣の住人とも協調し合いながら，街全体を防風林で囲むことで，台風の猛威から自分たちの生活を守ってきたのである。

写真１　沖縄・備瀬の集落

写真２　現代の沖縄の住宅地

一方，沖縄の現代の住宅地（写真２）と比べてみると，そこには，全く緑が見られず，備瀬のような豊かな景観がなくなっている。その理由は，いたって簡単で，沖縄では60年代頃から住宅がコンクリート化され，住宅が強固になったために，台風に対する備えとして樹木を植える必要性がなくなったのである。さらに，そこにエアコンなどの技術が導入され，外がどんなに劣悪な気候でも，内にこもってスイッチ一つで快適さを得ることができるようになってきた。

このように，かつての日本の個人の生活は，地域の環境と深く結び付いていて，同じ地域の住人にとっては，地域の環境は共通した生活基盤そのものであった。こうした共通の利害に結びついた地域の環境を整え合う関係が，地域のコミュニティを機能させてきたのである。

ところが，現代の都市における住まいは，地域の環境とは独立した存在となり，その結果，都市における環境は，もはや，その住人にとっての共通した利害対象ではなくなり，住人同士が互いに関係を大切にすることの意味が小さくなり，やがて，コミュニティは崩壊することになる。

つまり，かつて省くことのできなかった「プロセス」が地域の豊かな環境を育み，同時に「コミュニティ」を形成してきたのである。

こうした共通の生活基盤を育みあう中で，そこに地域のしきたりや風習が伝承され，それが有形無形の伝統文化を形成することになる。

こうして個人は，同じ地域の住人との密接な関係の中で暮らし，その地域の中で継承されてきた歴史の中で暮らすことになる。そして，個人は，そうした人間関係と歴史との関係の中で相互作用を及ぼし合い，そこに参加している存在となる。その個人の立ち位置が個人に尊厳を与え，それが，「しあわせ」の核となるのだと思う。

6 「便利さ」と「ゆとり」とを兼ね備えた住まい

「パッシブ」しか志向できなかった時代は，不便であった。そして，「アクティブ」のみを重視してきた現代では，「便利さ」を手に入れたが，「ゆとり」を失った。

「ゆとり」のある住まいを実現させるためには，「アクティブ」と「パッシブ」，どちらかを選ぶということではなく，それぞれを掛け合わせることが重要だと私は考えている。

かつて日本で育まれてきた伝統的な文化と，地域の歴史，コミュニティ，そして，目覚ましい技術革新によって生まれた今日の優れた装置。暮らしの場をデザインする上で活用できる要素は，大変幅広くなっている。それを，狭い範囲で仕上げるのではなく，余すことなく使いこなす。それが，「便利さ」と「ゆとり」とを兼ね備えた住まいのつくり方だと思う。

住まいづくりに従事する人たちの仕事は，単なる箱をつくることではなく，未来に向けた生活のあり方をどのように選択するか，そこで暮らそうとする人とともに検討し，カタチにすることである。この仕事の面白さは，そこで実際に実現させた住まいのカタチが，そこで暮らす人の「環境」や「コミュニティ」に対する意識を変容させるところにある。「便利さ」だけではない「しあわせ」を構成する大切な要素を「住まいのカタチ」が再認識させてくれるのである。

一つひとつの仕事は，小さなものでも，そこで暮らす人たちの関わりが社会に影響し，やがて世の中は変わっていく。そんな未来が必ずやってくるように思える。こうして未来へとずっとつづく道のりを見つめていく暮らしこそが，「ゆとり」を大切にするということなのだと思う。